

## 現場の先生方と連携して研究ということ ②

みなさま、こんにちは。2回目となる今回は、学校の先生方を対象に、学校や大学、地域教育に携わる方々と連携・共同研究を進める際に大切だと思うことについて、書かせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

### 1) “現場目線”をいかしたテーマ設定

現在、私は教職大学院で仕事をしており、特に現職の先生方（若手教員やミドルリーダーの先生方）から、「このようなテーマで研究になるのでしょうか？」といった質問を受けることがあります。私の返答はいつも同じで、「そのテーマこそが、教育実践研究にふさわしいテーマではないでしょうか」とお答えします。事実、現職の先生方は、オリジナルな教育経験から生まれた、独創性に富むテーマをお持ちなのです。

また、自身の課題意識に基づくテーマだけでなく、学校の課題や教育ニーズに応えるという視点も大切です。これから研究を始められる先生方は、自己の課題と、現場からのニーズという両視点から、テーマの意義について見つめてみられることをお勧めします。

学校の先生方が関心を寄せられる研究テーマは、学校教育に関する実践的なテーマ（授業や教材の開発など）が多いと思われます。そのようなテーマは、往々にして、研究の発展とともに、学年組織や学校、あるいは地域との連携が必要となり、同僚だけでなく、地域の方々、あるいは研究者との協働が求められるものです。

そのような時に大切だと感じるのは、研究に関わる方々への“リスペクト”の気持ちです。研究への関わりは様々だと思いますが、いずれの場合でも、関わった方への敬意の気持ちを忘れないことが大切ではないでしょうか。

### 2) “研究倫理”をふまえた研究遂行

テーマが定まったら、研究倫理に十分配慮しながら、研究を遂行していきます。日本学術会議では、職務として研究に従事する者を「研究者」とし、大学に勤務し、職務として研究に従事している研究者には、必ず研究倫理の研修を受けることを義務付けています（日本学術振興会, 2015）。ただ、学校の先生方

には、このような研修は義務付けられていませんので、少し大変かもしれませんが、学会での勉強会等を活用するなどして、学んでいく必要があるでしょう。

研究倫理と聞くと、“捏造”、“改ざん”、“盗用”といった言葉を思い浮かべられる方が多いと思いますが、他にも調査の際の“インフォームドコンセント”、“データの取扱いや保管”、“個人情報保護”など、様々なことがあげられます。これらの内容は多岐にわたるため、私自身も、定期的に下記のような研究倫理に関する図書や資料に目を通すようにしています。これらの文献が、先生方にとってもご参考になれば幸いです。

## 参考文献

日本学術振興会「科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－【テキスト版】」

<https://www.jsps.go.jp/j-kousei/data/rinri.pdf>

日本学術振興会（2015）「科学の健全な発展のために－誠実な科学者の心得－」

## 3) 成果発表の際に留意すること

研究成果が得られた時は、何よりも嬉しさが先立ち、発表内容のことで頭がいっぱいになりがちですが、ここでも、上述のような個人情報の取扱いや、出典の表記等、様々な留意が求められます。特に、学会発表や論文発表を行う際には、研究内容はもとより、執筆者や謝辞等を含めて丁寧に検討していく姿勢が大切だと思います。

例えば、上述のテキスト（日本学術振興会, 2015）には、「オーサーシップの責任を踏まえ、誰を著者として名前を挙げるべきかは、とても重要な問題です。当然のことながら、論文の基となった研究の中で重要な貢献を果たした者には著者としての資格があり、そうでない者にはその資格はないと考えるべきです。」

「研究論文の発表にあたって、さまざまな形で協力してもらった関係者や、支給された研究費については、謝辞などの形で明記することが必要です。」と示されています。

ただ、それほど難しく考えることはありません。研究をゆっくりと振り返り、アイデアの起案に始まり、その成果が得られるまでに関わった方々を思い浮かべてみられると良いでしょう。例えば、教育実践研究の場合には、「アイデアや枠組みの提供者は？」「授業やプログラム等の考案は？」「授業者は？」「調査や分析を担当したのは？」「研究組織（学校組織）を統括したのは？」「研究者か

らの専門的知識の提供は？」などの視点から研究を思い返すと、とても感慨深く、全てのプロセスが愛おしく感じられるものです。

学校の先生方と研究者等との連携・協働研究は、大変魅力的で、個人研究では得られない研究・教育成果も期待されます。また、1回目に書かせていただいたように、研究者にとっては、これまでの研究成果を実践に繋ぐという意味においても、非常に貴重なことなのです。

それぞれの立場や役割を理解、尊重しながら、所属や視点の多様性、互いの強みをいかして、より良い研究が蓄積されることを期待しています。

(奈良教育大学 河崎智慧)